

# 研究 II

## 1. 目的

研究IIでは、研究Iで使用したブックレット（試案）が、実際の学校教育、とりわけ授業での活用において活用しうるものであるのか、改善点は何であるかを検討するため、小学校において使用してもらい、授業を行った教員に対して調査を行った。さらに、ブックレットを使用した授業に対する子どもたちの様子、ブックレット中の問いかけに対する実際の子どもたちの反応をみるため、子どもたちに対しても調査を行った。これらのデータを考察することで、本研究で作成した障害理解に関するツール開発を今後どのように進めていくかについての示唆を得ることを目的とした。

## 2. 方法

<調査対象>

公立小学校1～5年生のクラス（単学級）に在籍する児童とその担任教師

<調査日>

平成18年2月から3月

<調査手続きおよび内容>

### 1) 担任への調査

担任へはブックレットを利用とした授業の取り組み状況と子どもたちの様子について紙面による調査を行った（資料2）。調査に際しては、予め、ブックレットに掲載されている事例すべてを取り上げる必要はないことを告げた。さらに、子どもたちに対して、ブックレットを使用する際の手引き（例）も用意し、必要に応じて活用できるようにした。この手引きには、「最初の説明」「意見が出なかったときの補足説明」「（障害のある子どもへの）支援例」を、事例ごとに記したものである（資料3）。

### 2) 子どもへの調査

担任教師が配布する調査用紙（資料4）に記入するか、もしくは、担任教師による問いに口頭でこたえるかたちをとった。担任からの問いかけは「事例の子どもはどうしていると思うか?」「事例の子どもに何をあげようと思うか」の2点であり、合わせてブックレットの吹き出し部分にも記入してもらった。

## 3. 結果と考察

### 1) 担任への調査

方法では、ブックレットの事例全てを扱うのではなく、全ての学年が、事例を部分的に取りあげ利用していた。利用された事例は1年で2例、2年で1例、3年4例、4年で2例、5年で2例で

あり、ほとんどの学年で道徳の時間が利用されていた。4例を扱った3年生のみ、朝の会と帰りの会も利用されていた。今回の調査では、1時間の授業の中で扱える事例は2例が上限ということが示された。選ばれた事例の内訳は表3-1に示すとおりだが、その選択理由としては「クラスによく似た様子の子どもがいたから」が最も多く（3つの学年）、「授業で取り上げやすい事例だったから」、「子どもたちの反応を確認するため」が各々1つの学年で取り上げた理由であった。これらの結果から、身近によく似た子どもがいることが、授業で取り上げる要因となっていることが示唆された。

表3-1. ブックレットの事例について各学年の子どもの回答状況

	ウミ 病弱	ロク 肢体不自由	ナツ 不登校	ウララ 視覚障害	ハナ LD	カブ ADHD	クリオ 自閉症	ヨコ 聴覚障害	ノビオ 重度重複障害
1年生	12				12				
2年生	17		17						
3年生		16	16		15	16			
4年生		26			26				
5年生			20		20				

授業の中では、全ての教師が子どもたちに対し、「事例の子どもはどのような気持ちだと思うか?」「事例のような子どもに何ができると思うか?」と問いかけていた。その他、「事例のような子どもに何かしてあげたいと思うか?」という問いも1つの学年ではなされていた。

子どもたちの反応についてたずねた結果、授業やブックレットについてはいずれの学年でもやや興味を持ち、理解もしていたという評価であった。だが、「事例の子どもたちの気持ちがわかってきたか」という質問には2,3年生では「あまりわかっていないようだった」という回答であり、1年生では無回答と、その判断をすること自体も難しいようであった。

一方、ほとんどの学年で、事例の子どもに対して、「何かできたらいいなと感じているようだった」、「事例の子どもに何ができるか積極的に考えているようだった」といった印象が記述されていた。

手引き（例）として配布した補足資料については、5学年中3学年で利用されており（1学年は無回答）、ブックレットに出てくる事例について説明する補足的な資料や、子どもが考えることを支援する手だて、授業での活用方法例などを作成することが重要なことが示唆された。

さらに、提示の形態に関しては、具体的に、「1つの事例について取り上げられるよう、紙芝居などの方法を検討する必要がある」といった指摘もみられた。

ブックレットを活用してみた感想では、「授業などで先生が問いかけをしながら活用するのが適切だ」、「このようなタイプのものは今までなかったのでよかった」、「LDやADHDなども含まれている点よかった」などの評価があった。

## 2) 子どもへの調査

先述したとおり、ウミちゃん（病弱）、ロクくん（肢体不自由）、ナツくん（不登校）、ハナちゃん（LD）といった事例が多く取り上げられおり、特にナツくんとハナちゃんについては、低学年から高学年に渡り利用されていた。

発達段階による傾向をみるため、低学年から高学年に渡って使用されたこの2つの事例にしぼり、子どもの反応を分析・検討することにした。学年ごとに回答を内容面の特徴からカテゴリー化し、その数を表3-2に示した。

なお、子どもがブックレットの吹き出し部分に書き込む「つぶやき」と、調査項目で設けた「○ちゃんはどう思っているか」については、内容的に重なる部分が多かったため（表には別々に記載したが）、子どもたちの考えの傾向を捉える際、まとめて考察することとした。尚、カテゴリー化に際しては、3名による検討によって行った。

### ①ナツくんの場合（表3-2）

ナツくんの部分は、不登校がテーマであり、朝になるとお腹が痛くなってしまうという場面を事例として挙げている。特に2年生では「学校に行きたいな」「みんなと一緒に遊びたいな」といった学校へ行きたいという願望を挙げている回答が多くみられた。一方、5年生ではこのような願望の記述がなくなり、むしろ「学校に行ったらいじめられるからいやだ」「学校はつまらないから行きたくない」といった記述が多かった。

支援の方法については、2年生では、「家に行って学校であったことをお話ししてあげる」「お手紙を渡して喜ばせてあげる」「今度遊びたいと電話で言う」と学校での出来事を教えるという回答が多かった。また、「学校に行きたいのに残念だね。さみしいよね」とナツくんの気持ちに共感する回答もみられた。3年生の回答では、「お腹が痛いのが治るようにお見舞いをしてあげる」「一度学校に来るようにと誘ってあげる」などがみられ、低から中学年にかけては、何かをしてあげるという回答が多かったことがうかがえる。高学年になると、「一緒に学校に行こうと誘う」など、自分からはたらきかける支援だけでなく、「頑張ってみたら？」「大丈夫？」と相手の気持ちにはたらきかけるような支援方法がみられるようになった。

表3-2. ナツくんの事例についての子どもからの回答数（カテゴライズしたもの）

学年	つぶやき					ナツくんがどう思っているか					どのような支援をしようと思うか						
	願望	悲しい	くやしい	疑問	その他	願望	悲しい	くやしい	疑問	その他	自分の視点			共感	相手の視点		その他
											一緒にしよう と誘う	してあげると 提案	その他		励まし	気遣い	
2年生	9	3	0	3	2	0	0	0	0	0	0	13	1	1	1	1	0
3年生	3	0	0	2	0	11	0	0	1	0	0	7	2	0	1	4	1
5年生	0	0	0	0	6	5	0	0	2	13	7	2	3	0	4	4	1

②ハナちゃんの場合（表3-3）

本を読むことに特異な困難のあるハナちゃんが、音読の授業で当てられ困っている場面を事例として挙げている。1年生では、ハナちゃんをつぶやきとして、「上手に読みたいな」「上手になったらみんなと本を読みたいな」といった願望と判断される回答が多かった。しかし、3年生になると、「読むのが苦手ってわかっているのに、先生はどうして私に読ませるのかな？」「どうやったら上手に読めるようになるのかな？」と自分ができないことへの疑問、周囲への対応への問いかけがみられた。このように、学年が上がるにつれ「一生懸命読んでいるのに、少しの事でそんなに変なこと言うの？」「読むのが苦手なんだから、そんなに言わないで」「読むのが苦手なのにみんなひどい」「ちゃんと練習してるのにできない。でも、頑張ってるんだから・・・」「私だって一生懸命やってるのよ」「バカにするな！好きで読むのが下手なんじゃない」といった表現が多くなっていった。

支援の方法は、1年生では「一緒に練習してあげる」という回答が多かったが、3年生以上ではみられなくなり、「読み方を教えてあげる」「小さい声で言ってあげる」というその場で行うことができる支援が増えている。5年生では、「家で練習するようにすすめる」「悪口を言わない」「悪口を言っている子を黙らせる」など、周囲の環境にはたらきかけるような支援方法もみられた。また、全学年を通して「失敗してもいいから頑張ると励ます」「無理に読ませずに待つ」「大丈夫だよと励ます」といった支援もみられた。

表3-3. ハナちゃんの事例についての子どもからの回答数（カテゴライズしたもの）

学年	つぶやき					ハナちゃんがどう思っているか					どのような支援をしようと思うか						
	願望	悲しい	くやしい	疑問	その他	願望	悲しい	くやしい	疑問	その他	自分の視点			共感	相手の視点		その他
											一緒にしよう	してみたらと誘う	と誘う		励まし	気遣い	
1年生	7	3	1	1	1	1	0	0	0	0	3	2	1	0	2	3	0
3年生	0	1	3	0	0	4	2	2	2	2	0	6	4	0	4	2	0
4年生	0	0	0	0	0	3	9	9	1	4	0	13	0	0	5	3	5
5年生	0	0	3	1	2	2	8	4	2	4	0	6	0	0	6	6	2

2つの事例を通していえることは、障害理解をすすめるにあたっては、年齢的な発達の影響も考慮する必要があること、それと同時に、子どもたちが普段過ごしているクラスの雰囲気や友人関係といった様々な要因が関与することが推察された。佐藤・徳田（1993）の研究においても、障害理解教育においては、障害のある子どもの状態とともに、周囲の子どもたちの理解等の個人差なども影響することが指摘されており、こうした要因においても考える必要があると思われる。